

大人は漢字を使う魔法使い？

新谷 雅弘

子どもがまだ幼いころに「お父さんたち漢字人は……」と言ったことがあります。どこかで仕入れてきたことばだとしても、うまいなあと感じました。やつと平仮名を覚え始めた子どもには、漢字を易々と書いている大人たちは、次元の違う世界にいる魔法使いのように見えたのかも知れません。そこには「いいなあ」というあこがれに似た感情もあったように思います。この感情が何かによってその後に損なわれてしまうことが多いという事情については詳しくは知りません。しかしテストならあの重圧は何年を経ても忘れられませんが、そのことであこがれの漢字人への道も、試練をとまなうものであるのを知ることにはなつたでしょう。しかし漢字人となつても立派な漢字人への道はさらに遠いのです。

わたしは長い間雑誌のデザインをしてきて、そのなかに青少年を対象としたものがありました。ある日若い編集者が原稿を書きながら（原稿用紙に手で書くしかなかった時代）何かにつまつたようすで、そばに置いた辞典を手にした途端、「見るな！」という鋭い声がとんできました。その声は「書けないなら平仮名にしておけ！」と続きます。あとになって声の主に聞きますと、まともに書くこともできない漢字を使つても、似たレベルの読者には伝わらないからだと申しました。たしかにそのときに書き手が思い浮かべたことばは、彼

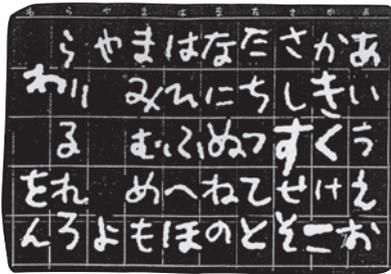
には生半可にしか理解されていなかったのでしょう。そこで、漢字の強そうな力に無意識にすがろうとしたのかも知れません。

デザイナーは本のタイトルなどを手書きするときには、内容にふさわしい文字を、絵を描くようにデザインしながら漢字の力を利用しようとする。

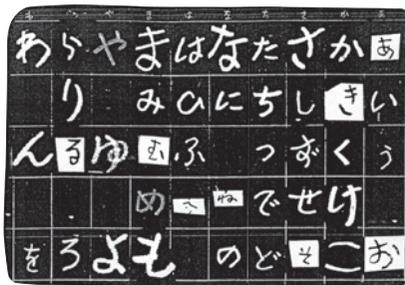
みなさんが今見ているこの活字も、元をただせば、手で一字一字書いたものです。それをだれでもが読みやすくするために、書き手の癖や個性を感じさせないように工夫してあります。

活字は縦横どちらに並べても列が凸凹にならず、まっすぐに見えるようにつくられています。字には一つ一つ独自の中心点があります。その中心点が、与えられた四角の中で、縦に並べた場合も横でも天地左右中心にくるようになっていなくてはなりません。活字をつくる時、この中心点を見つけた作業が、特にパソコンの無い時代には何年もかかる大作業だったといえます。字をつくる名人が見つめ尽くしてやつとたりついたので、でも手書きにちがいはないので、書体ごとに独特の癖やイメージがあります。編集デザイナーはその点を活用するのが役目となります。それに対してデザイナーやイラストレーターや漫画家が、故意に活字の標準からはずれた形の字を書い

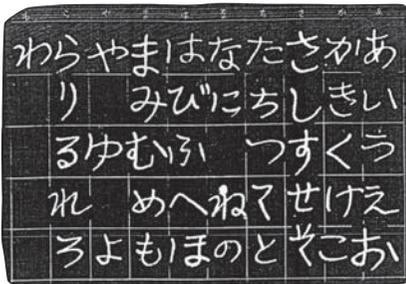
しんたに まさひろ 1943年大阪市生まれ。広告代理店を経て、1970年『アンアン』創刊に参加して以後、編集デザインを中心に活動をしている。



デザイナー
絵本画家
堀内誠一の
あいうえお



編集者
イラストレーター
花森安治の
あいうえお



サザエさんの
漫画家
長谷川町子の
あいうえお

て主題を強く主張しようとする場合がありますが、基本は美しくかつ読み易くなくてはいけません。上に示したのは、わたしが以前個人的な研究のために「○○さんのあいうえお」と題して、先輩たちの書いた文字のうち平仮名だけを、彼らの作品の中から拾い出して並べたものです。

「考えるスピードと同じに書ける字体や用具でなくてはいけない」と言っていた堀内誠一さんの字はスピード感を得るために、はねの部分などが省略されて目の前を走り抜けていくような感じがします。

花森安治さんの字は別室にこもって書いたといわれ、息を止めたような力がこもっています。わたしは花森さんの書き文字を見るためだけに『暮らしの手帖』を買う、マニアみたいなこともしていました。ちょっと失礼な本の買い方でした。

長谷川町子さんの字は『サザエさん』から拾いました。新聞漫画は何百万人も老若男女が間違わずに読んでくれる字でなくてはなりません。どんな字がいいのでしょうか。ここにその答えがあります。

この表を見てくれた文字を専門に開発している経験豊かな人が、「趣味での研究なら平仮名だけにしたほうがいいですよ。漢字は地獄です」と助言してくれたのが忘れられません。漢字には魔法がかかっているのだと思います。